こころを育む
総合フォーラム

こころを育む総合フォーラム

2022年度活動報告書

公益財団法人 パナソニック教育財団

こころを育む総合フォーラム より

「こころを育む総合フォーラム」は、日本人のこころの荒廃に危機感を抱き、はどめをかけたいとの思いを共有する有識者16名が集い、2005年4月に設立されました。

設立以来、日本人のこころのありようについて討議を重ね、2007年に未来を担う子どもたちのためにできることを提言にまとめ、発表しました。提言では、家庭・学校・地域・企業の4つの分野に、それぞれの立場で子どもたちのこころを育むことを「問い」のメッセージとして呼びかけました。

2008年、この提言内容を全国にムーブメントとして広げていくために、子どもたちの“こころを育む活動”を応援する全国運動を始めました。毎年、全国各地で取り組まれているこころを育む優れた活動を募集・表彰し、広く紹介しています。

2019年、鷲田清一を座長に新たな体制で第二期をスタートしました。自薦に加え、推薦での応募もできるようにすることで、より多くの活動に光があたるようにしました。

本書が“こころを育む”環境づくりのための取り組みのヒントになり、活動の輪がさらに広まるきっかけとなれば幸いです。

活動の経緯

2005年 **「こころを育む総合フォーラム」発足**
学界、経済界をはじめ各界を代表する16名のメンバーで発足

2007年 **議論をまとめた「提言書」をプレス発表**
発足から計18回の討議を経て、提言書を公表

2008年 **「全国運動」スタート**
全国キャラバン、子どもたちの“こころを育む活動”の募集・表彰を開始

2011年 **トヨタ財団・パナソニック教育財団「東日本大震災支援共同プロジェクト」**
「子どもの居場所づくりと次世代の育成」に向けた取り組みを支援

2013年 **特別対談企画「日本人としての教養〜次世代に継承したいこと」連載**
山折座長と有識者7名によるウェブ対談を実施（東洋経済オンラインとの共同企画）

2015年 **フォーラム活動10年**
東京にてフォーラム活動10年特別シンポジウムを開催

2017年 **全国運動10年**
10周年記念表彰式を開催

2019年 **「第二期 こころを育む総合フォーラム」をスタート**
鷲田座長を中心に新たなメンバー11名でスタート

提言書

2007年、フォーラムの思いを提言書にまとめて公表しました。家庭・学校・地域・企業の4つの分野で、子どもたちのこころの育みのために大人たちができることを、自己の内心に向かって問いかける「七つの問い」の形で呼びかけています。

具体的には、家庭に向けて「親（保護者）の姿勢が、子どものこころを創っているという自覚があるだろうか」、学校に向けては「教師は、一人ひとりの子どもに自信をもたせる努力をしているだろうか」など、4分野それぞれに対して「七つの問い」を提案しています。

提言書の詳細は、「こころを育む総合フォーラム」ホームページでご覧いただけます。
https://www.pef.or.jp/kokoro-forum/phase1/message/

フォーラムの目指す姿

家庭・学校・地域・企業などで取り組まれている「子どもたちの“こころを育む活動”」を通して、子供たちに持ってほしい“3つのこころ”をバランスよく育むことを目指しています。

こころを育む総合フォーラム メンバー

鷲田 清一
大阪大学 名誉教授

入江　杏
文筆家、「ミシュカの森」主宰、
上智大学グリーフケア研究所
非常勤講師

小国 綾子
毎日新聞
ジャーナリスト

工藤　啓
認定NPO法人育て上げネット
理事長

玄田 有史
東京大学
社会科学研究所長

鈴木 みゆき
國學院大學
人間開発学部
子ども支援学科教授

高際 伊都子
渋谷教育学園
渋谷中学高等学校
校長

福田 里香
パナソニックホールディングス株式会社
CSR・企業市民活動
担当室 室長

増田 明美
スポーツジャーナリスト、
大阪芸術大学 教授

山極 壽一
総合地球環境学
研究所 所長、
前京都大学総長

2022年度 子どもたちの”こころを育む活動”表彰式

2022年度の「子どもたちの “こころを育む活動” 表彰式」を、2023年2月9日、第一ホテル東京にて開催いたしました。3年ぶりに対面での開催となり、協力団体、フォーラムメンバー、当財団役員など40名の方々がご来場されました。

2022年度は、全国から159件のご応募をいただき、書類選考、現地調査およびオンラインでの質疑応答などの厳正な審査を行った結果、高い評価を得た7団体を表彰いたしました。

式の模様はYouTubeでも配信され、多くの方々にご視聴いただきました。

ここでは、表彰式から交流会までの和やかななかにも活気あふれる様子をご紹介いたします。

ご挨拶

来賓を代表して、文部科学省大臣官房審議官　総合教育政策局担当の里見氏より「子どもたちには、自分の良さや可能性を認識し、豊かな人生を切り拓くとともに、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の担い手となることが求められていくと思われます。また、少子化、核家族化、デジタル化に続き、コロナ禍で人との関わりが難しくなるなか、さまざまな体験や交流の場と実際的な教育を提供してこられた素晴らしい活動は、今後さらに重要になると考えております。受賞を機に、皆様の活動が一層発展することを祈念しております」との温かいご祝辞をいただきました。

当財団の小野理事長からは「スマートフォンを使った犯罪が増えている昨今こそ、子どものころからこころを育むことが大切です。15回を迎えた表彰も、それぞれ非常に個性的でこころ温まる活動ばかり。活動が全国に広まり、大人も含めてこころ豊かな、明るい未来を築ける社会になってほしいと切に願っています」と、今後に期待する言葉が贈られました。

主催者挨拶
パナソニック教育財団　理事長
小野 元之

来賓ご挨拶
文部科学省 大臣官房審議官
総合教育政策局担当　里見 朋香氏

各賞の発表・表彰

各受賞団体の活動を動画で紹介後、いよいよ、奨励賞、優秀賞、全国大賞の順に受賞団体を発表。賞状と記念の楯、目録が手渡され、受賞した各団体の代表者は、感想や今後の抱負などを語りました。

全国大賞を受賞した奥出雲町立高尾小学校の桑山校長は、感謝の言葉に続けて「子どもたちに大勢の前でも物おじしないたくましいこころや自己表現力を育成したい思いで『にこにこ寄席』を始め、10年目を迎えました。全校児童5名は現在、出雲市で出張寄席の最中であり、小学校はあと3年で統合する予定です」と報告。「全国どこへでもまいりますので、ぜひ呼んでください」と呼びかけると、会場内に賞賛の拍手が響き渡りました。

受賞された皆様の晴れやかな笑顔と喜びの言葉に、活動を地域で支えてきた日々の努力が想起される、感動的なひと時となりました。

受賞の感想を語る奥出雲町立高尾小学校　桑山悟校長

祝辞

座長　鷲田清一氏（大阪大学名誉教授）

教育とは、おせっかいのことだと思います。

力を合わせて次の時代まで生き延びて、大切なことをまた次の世代に伝えることが、教育の一番コアにあるものの、言ってもすぐにはわかってもらえない。子どもの立場からは「かまわないでよ、うるさいなぁ」というのが、本音だと思います。しかし、学びには、学んだ後でないと学ぶ意味がわからない逆説的な性格がある。例えば、「外国で働かないのに、何のために外国語を学ぶのか」「習字は字を書ければいいのに、肘の動きばかり注意される」など。

このおせっかいの一番極端な形が、学校教育です。教育の現場では「これだけは絶対に覚えておけ」と、おせっかいの押し付けがエスカレートする事態がよく起こります。その典型が校則です。大学の講義では90分間も一方がしゃべりっぱなしで一方は聞きっぱなし。さらに、わからない人が質問するのが普通なのに、教室では知っている人に先生が「フランス革命は何年か」と質問します。学校教育の在り方のなかには、本当に大切なものと、どうでもいいことが反転する怖さがあるのです。押し付けの反対の極端な例として、「何も教えない」という教育があります。お家元の一子相伝や料理人の世界で「勝手に見て覚えろ」という指導があります。おせっかいはそのどちらでもなく、塩梅がすごく難しい。押し付けでも一子相伝でもない、その場にいると子どもたちが勝手に育つ場をつくることが大切だと思います。

今年度受賞された皆様方は、そこに子どもがいれば勝手に育つような場を、いろんな形で工夫してつくってこられたのだと思います。私たちは、学校のやり方とは全然違う工夫・やり方であっても、これも教育だというモデルを、全国に伝えていく責任があると思っています。皆様には、今後もますます楽しいおせっかい、うれしいおせっかいを続けていただけますようお願い申し上げます。本日は、本当におめでとうございました。

交流会

会場には、
受賞団体の活動を
紹介するパネルや
資料を展示

受賞団体同士の情報
交換やフォーラム
メンバーとの交流が
活発に行われました

▲乾杯のご発声は、フォーラムメンバーの入江杏氏

受賞団体 活動紹介

全国大賞

島根県奥出雲町立高尾小学校【島根県】

愛されて十年　ちっちゃな小学校の全校落語

選考理由　非常にユニークな手法で子どもたちの豊かな人間性を育んでいます。子どもたち同士が支えあい、一生懸命取り組む姿が地域の交流を生み、元気づけている点が高く評価されました。極小規模校ならではの活動でありながら、それだけにとどまらない好事例といえます。

活動の概要と目的

極小規模校から大きな社会へ向けて
表現力と積極性を育む「座布団一枚からの挑戦」

島根県南東部の山間にある奥出雲町立高尾小学校は、全校児童5名の極小規模校。積極的な自己表現と大きな社会との関わりを求めて、2013年から全校児童による「高尾小にこにこ寄席」を展開しています。

同校は極少人数のため、低学年・中学年・高学年が2学年ずつ共に学ぶ「複式学級」の小学校です。子どもたちは多様な出会いから刺激を受けることが少なく、内向きな性格の傾向が強いと言われていました。そこへ10年前、教頭として宮森健次先生が赴任。積極的な児童を育成しようと、中学年の総合的な学習の時間に「座布団一枚からの挑戦」を始めたのが、活動のスタートです。

地域のお年寄りを対象に〈笑いと健康寄席〉を開催して評判になり、町内外から招かれるように。地域に愛されて10年。2023年3月末までに開催した寄席は通算で191回を数え、17名の歴代噺家を育んできました。落語を通して視野を広げ、夢と誇りを持ち、意欲的に生きる子どもたちの姿があります。

2023年3月現在、全校生徒は5名。2023年4月以降に入学予定の児童はいないため、2026年4月に小学校統合に伴い閉校となります。

2019年9月、日本大学文理学部で行われた日本学習社会学会主催「にこにこ寄席・東京公演」。

人前で話すだけでなく、身体を大きく使った表現で会場を沸かせます。

子どもたちの変化・成長

引っ込み思案だった子どもが高座という場数を踏み、仲間やお客さんとのふれあいを糧に驚くほど伸び、大勢の人の前で堂々と話せるようになっていきます。読解力や想像力、表現力の向上が見られます。

参加者の声

好きな落語が人のために役立って、人を幸せにする。こんなすてきなことが起こるなんて、夢にも思いませんでした。（小学6年生）

ありがとう「にこにこ寄席」。落語が私の人生を変えてくれました。下を向いていた私。今ではみんなの前で堂々と話せます。（小学6年生）

平和を感じる瞬間は、人の笑顔を見るときです。平和な世の中に感謝して、笑顔が広がる落語をこれからもしていきたいです。（小学6年生）

お客さんを笑わせることができてよかったです。落語で笑って、一緒に防災のことも学んでもらえたらうれしいです。（小学6年生）

この前よりお客さんが笑ってくれた、とすごく喜んで帰ってきました。もじもじ感がなくなり、かなり自信がついたと思います。（保護者）

地域と一体となって子どもたちを育てている。この子たちがいつか地域を育ててくれるんじゃないかと思います。（みずうみ赤十字奉仕団員）

今後の課題と未来の方向性

歌手木山裕策さんとのコラボステージ、東京公演の継続、OBを集めた大同窓会公演など多数の夢があります。しかし、2023年度以降に入学予定の児童は高尾地区には見当たらず、2026年4月には小学校統合に伴って閉校となります。“地域の宝”と呼ばれるまでになった「にこにこ寄席」を残したいという声が多く寄せられ、この活動が周辺の学校や地域に広がり継続されることを願っています。

活動の特長

笑いと健康を届け、地域の宝となった「にこにこ寄席」

活動の原点は、地域の高齢者サロンでの〈笑いと健康寄席〉。「評判の高尾小にこにこ寄席が来るなら行こうか」と、町の社会福祉協議会が開く高齢者サロンには、普段の2、3倍を超える参加者があります。多くの高齢者サロンでは血圧測定や健康相談も行われているため、「にこにこ寄席」はお年寄りの健康を守りつつ、地域住民の交流機会の増加にも一役買っています。

地域のお年寄りが楽しみにする「にこにこ寄席」。たびたびテレビ局が取材に訪れ、ニュース放映されています。

青少年赤十字加盟校として地域貢献の幅を広げる

2016年4月、高尾小学校は青少年赤十字加盟校となり、熊本地震や西日本豪雨の被災地へ、寄席のご祝儀や義援金募金を送りました。これを機にだれかの力になれる「にこにこ寄席」を目指して、①笑いと健康寄席、②西日本豪雨災害チャリティー寄席、③防犯・交通安全寄席、④小児がん対策チャリティー寄席を展開するようになり、地域貢献の幅を広げています。

落語を披露した後、被災地のために募金活動をするチャリティー寄席も多く開催しています。

子どもたちに寛容の心と逞しい心が育つ高座

どんなに稽古をしても高座で頭の中が真っ白になることがあります。そんなとき、楽屋は「大丈夫だよ」と笑顔のメッセージ。その心地よい笑いに救われて、人の失敗に寛容になることを覚え、下級生の稽古をつけるようになっていきます。このように異学年少人数集団の複式教育は、計算外のさまざまな教育効果が生まれます。言葉を絞り出す姿に感動したお客さんからの温かい眼差しで、子ども落語家は逞しく成長していきます。

6年間の活動で大きく成長した6年生の噺家。身振り手振りを交えて軽やかに得意ネタを披露。

活動の広がり

お客様からの要望に応じて、笑いと健康、防災や防犯、医療などのテーマで主に子どもたちが創作落語を考え、寄席を開催します。落語の稽古は国語、総合的な学習の時間、必修クラブ、家庭学習で行います。こうした活動から、島根県優れた教育活動表彰を2回受け、2019年度には日本学習社会学会の企画公演（東京）に招かれました。2020年には紅白歌手・木山裕策さんとのコラボ公演を実現。活動は大きく広がっています。

コロナ禍の2020年、紅白歌手・木山裕策さんとオンライン交流を続け、同年10月には木山さんが高尾小に来校。「木山裕策コンサート&にこにこ寄席」が実現しました。

連絡先
●所在地：〒699-1512　島根県仁多郡奥出雲町高尾823　●TEL：0854-54-9030
●E-mail：takaotc1@town.okuizumo.shimane.jp　●ホームページ：http:www.town.okuizumo.shimane.jp/www/takao_es/index.html
●代表者：桑山 悟（校長）　●担当者：川上 宜久（教諭）

優秀賞

ハート&アート空間 ビーアイ【宮城県】

35年続く「自分である」ことが嬉しい空間

選考理由 子どもたちの「やりたい」を引き出すことで、自己表現力やコミュニケーション力、個性や多様性など、社会に出た時に大切な土台の部分が育まれています。その自分らしさを育てるための場づくりや出会いづくりが特に優れている点が高く評価されました。

活動の概要と目的

絵を描いたり、作品を作るワークショップを通して、生きる力を付けていく

子どもたちを応援するような空間つくりが目的です。ビーアイは「自分であれ」を意味します。

ワークショップを通じ、絵を描いたり、作品を作るなど創造表現活動に取り組みます。絵の技術の向上が目的ではなく、子どもたちの自由な発想と意思を尊重し、「自分がどうしたいのか」を見つけていく空間。

外部から講師を招いたり、「海苔づくり」や「さくらんぼ狩り」など、生産者を訪ね、直接教わる活動も。店舗やギャラリーの協力で行う作品展など、親や先生以外の大人と対話ができる機会を工夫しています。

「ヒト、モノ、自然、言葉」に対し、子どもの感性は、どのように出会うのかによって決まります。それが元になって、大人になっていきます。量ではなく「質」的に、どう出会うのか。自分の存在を肯定し、生きる力を付けていくことが目標です。

1週目は「昔はどのようにしていたのか」、2週目「今、それはどうしているのか」、3 週目に「じゃあ、きみならどうするのか?」と進んでいきます。

言葉を使わず「絵」で、しりとりをします。前後の絵とつながるのか? 終わりをどうするのか? 相談しながら改良を加えていきます。

子どもたちの変化・成長

最初は「何を描くのか」「どの紙を使うのか」、題材・画材選びなどに、悩んだり迷ったりしていた子どもたちも、ワークショップの積み重ねの中で、すぐに選べるようになっていきます。自信をつけ、不測の事態が起こったとしても、慌てずに対処、工夫ができるようになります。

参加者の声

ビーアイは自由。楽しいがいっぱい。好きに描き、いろんな人がいて仲良くなれたり。作品展では他の人の絵も見れて楽しいよ。(小学4年生)

テーマは一応あるけれど、自分で自由に表現できるところがいい。2歳半ぐらいから来ているけど、いつも新しい発見がある。(小学6年生)

物は目があいているだけでは見えない。見ようとしないと…。生活するうえでも、気付かなかったことを教えてもらいました。(中学2年生)

通ううちに周りとの交わりの中で、その時期の子どもとして、自分の力で子どもらしく表現することを見つけました。(保護者の母親)

年少から6年。いそいそ準備して楽しそうに通っている。「まち力ミュージアム」でメッセージをもらい、自信につなげている。(保護者の父親)

全面尊重され、気づかない良い所を引き出してもらっているな。自分達で作り、みんなで食べるから、なおおいしい。(ボランティアの大学生)

今後の課題と未来の方向性

子どもたちが大人になっていくのが楽しみ。スタッフ自身も卒業して、いろいろな地域、場所で活躍しています。少子化の影響で、過去には100人以上の子供たちが通っていましたが、現在は合計45~50人。会費による収入が少なくなってしまい、財政面で運営は厳しく、持ち出しが多い。今後の課題です。

活動の特長

2歳の子どもから大人まで世代を越えた交流が。

2~3歳と保護者のクラス、3~6歳、小学生、中学生から大人までの概ね4種類のクラス。1クラス3~10人、平均して7・8人が同じクラスで学びます。思うようにならないときは、発想を変えたり、その場に合わせた臨機応変力も必要。一つ一つが、選択力と決断力の連続です。ワークショップは、週一回。耳が聞こえなかったり、障害をもった子どもたちも、一緒に活動しています。12月には、子ども自身が内容や脚本を考え、劇やペープサート（紙人形劇）をする「アイアイパーティー」を行います。

油絵ワークの授業。中学生から大人までのクラスです。親や先生以外の大人との対話ができるように、工夫しています。

街を丸ごとミュージアムに見立てた「せんだいまち力ミュージアム」

年に一度、街を丸ごとミュージアムに見立て、仙台市中心部の店舗やギャラリー約20か所に作品を置かせてもらいます。約14年続いているこの企画。当初は宮城県美術館で行っていましたが、夕方には閉館してしまうため、お店に場所を貸してもらうことになったのが始まりです。仕事終わりの保護者の方も立ち寄れるようになりました。作品が飾られた菓子店、酒販店やジュエリーショップなどの店舗に、子どもたちが訪問。お店の人とやり取りする中で、社会と自分との関係性を学びます。

「風神雷神」を布に描いて、クッションに。風神雷神のどこをどう切り取って、自分流にアレンジするのかは子どもたちが決めていきます。

明治8年に開園した仙台市内の公園「西公園を遊ぼうプロジェクト」

西公園の開園は、明治8年。広瀬川の左岸沿いにあり、青葉山が眺められる歴史ある公園です。震災後、寂れてしまった西公園を再生させるプロジェクトでは、剪定や草刈りを行い、公園の使い方を考えるシンポジウムなどを開催しています。養蜂園指導の下、はちみつ作りも。年4~5回、採蜜し「西公園はちみつ」として、販売しています。3年目となる2022年の収穫量は、約200ｋｇ。現在は、県内外から注文が寄せられるように。

西公園の面積は、東京ドーム2.3個分。自然から学ぶことはたくさんあります。

活動の広がり

ビーアイは1987年にスタート。自然豊かな西公園（仙台市）を、自分たちの庭のようにしたいと、現在の場所に。35年前の設立当初は、学校でも保育園でもなく学習塾でもない、児童館でもないので、社会的に認知されにくかったこともありました。これまでに2000人近くの子どもたちがビーアイから巣立ちましたが、デザイナー、医師、飛行機整備士、作曲家、フードライターと、その職業にも多様性があります。

活動スケジュール

週1回 …… ワークショップ
3月 …… 「せんだいまち力ミュージアム」
12月 …… 「アイアイパーティー」劇やペープサート（紙人形劇）を実施

連絡先
●所在地：〒980-0822　宮城県仙台市青葉区立町20-11ミカミハウス2F　●TEL：022-262-2969
●E-mail：zoukabako@gold.ocn.ne.jp　●ホームページ：https://www.facebook.com/bei1987
●代表者：関口 怜子　●担当者：清水 千佳

優秀賞

白石市立福岡中学校【宮城県】

ともにつくろう白石の未来～White Will（しろい志）～

選考理由　地方の少子化が進む中、特別支援学校も含めた学校間の連携で「自分たちができること」で助けあうことにより、社会性や共生のこころを育んでいます。子どもたちが主体的に地域に関わるようになるなど、行動変容をもたらせている点も高い評価を得ました。

活動の概要と目的

ものづくりを通して、地域への心豊かな思いを育てる。
人や社会とかかわるなかで、主体的に考え、行動できるように。

令和元年、宮城県教育委員会からの指定を受け、事業をスタート。こけし職人さん指導の下「アマビエこけし」を制作したのが始まりです。

ものづくりを活動の軸として、生徒の「自己有用感」を育みます。「地域に目を向ける力、自分たちで何ができるのか、地域を盛り上げよう」という地域貢献の気持ちを育てています。

市内の小学校、高校、特別支援学校と連携。志教育（①人とかかわる②自分自身、より良い生き方を求める③社会の中で自分の役割を果たす）の推進を図っています。

「しろいし蔵王高原マラソン」では、出場した生徒のほかに、ボランティアとして参加した生徒が多数。将来を見つめ、志の実現に向け、学ぶ意欲を高めていく力を付けます。

生徒の意見や考えを中心に進めること、地域の人など、相手を意識して活動すること、の2点を大切にしています。

ものづくり活動2年目の「福丸ランプ」の制作。全校生徒が参加します。福祉施設や高齢者施設、公民館、駅などに贈りました。

「フラワーラインプロジェクト」では、市内各所にあるプランターの花の植え替えを行いました。

子どもたちの変化・成長

「走るのは無理だけど、ボランティアとして手伝いたい」との声が上がり、「しろいし蔵王高原マラソン」のボランティアとして大会運営に携わりました。ペットボトルを渡したり、荷物を運んだりと活躍。「やらされ感」からではなく、生徒たち自身が主体的に活動できるようになりました。

参加者の声

医療従事者の方が患者さんのために頑張っていることを思いながら作りました。福丸ランプが励みになるとうれしいです。（中学3年生）

フォトコラージュに使う写真を撮りに行って、自然や食べ物など町の良さを再確認しました。もっと白石をPRしていきたい。（中学2年生）

支援学校の人に教えてもらい紙を作ることができました。この紙で世界に一つだけの封筒（親への手紙用）を作りたいです。（中学2年生）

マラソン大会に、ボランティアとして参加。地域の一員として役に立てたのが、うれしかった。また、参加したい。（中学2年生）

こけし職人の方に教えてもらい，思った以上に上手に「アマビエこけし」ができました。疫病退散になってほしいです。（中学1年生）

こけしで有名な白石に住んでいるのに，初めて「アマビエこけし」を知りました。みんなが安心して生活できるようになってほしい。（中学1年生）

今後の課題と未来の方向性

「地域に目を向ける力、地域の中で何ができるのか、地域を自分たちで盛り上げよう」という地域貢献の気持ちが育ってくればいいなと。そして地域社会に、今度は、自分たちの気持ちや日ごろの感謝など、メッセージを発信していきたい。モノだけではなく言葉として、表現、発信していくことが、これからの課題です。県からの助成は3年間で、終わってしまったため、費用を各学校で負担することに。福岡中学でも、PTA会援助費から捻出していて財政的には厳しいのですが、細く長く続けていきたいです。

活動の特長

白石市の特産品を利用したものづくりギフトプロジェクト

初年度は「アマビエこけし」を生徒全員で作りました。翌年度はランプシェード「福丸ランプ」、翌々年はフォトコラージュ「私のまち白石」を制作。フォトコラージュは、生徒たちの「地域のコラージュを作製してみたい」という意見から、生徒会が企画したものです。作品は、福祉施設や高齢者施設、公民館、駅などに贈りました。1年目のアマビエこけし、2年目ランプシェード、3年目コラージュと一巡し学年が変わるので、繰り返すことも考えていましたが、生徒たちに新たに提案してもらうことも視野に入れたい。

「アマビエこけし」の制作。アマビエは、疫病を封じる妖怪。白石市の弥治郎地区では古くから、こけしが作られてきました。

紙すきによる封筒づくり。生徒が保護者に手渡します

「立志式」で生徒が保護者に手渡す封筒を制作しました。立志式とは、中学二年生が「こういう人間になりたい」「将来こういう人になりたい」などを宣言する式。その内容を書いた手紙を入れる封筒として利用します。今年度からは、その白い封筒に「折り染め」を施すことに。「立志式での封筒は、手紙と一緒にとっておきます」と言う保護者も。

日本で古くから行われていた元服にあたる儀式が「立志式」。立志式での封筒に、折り染めで色を付けています。

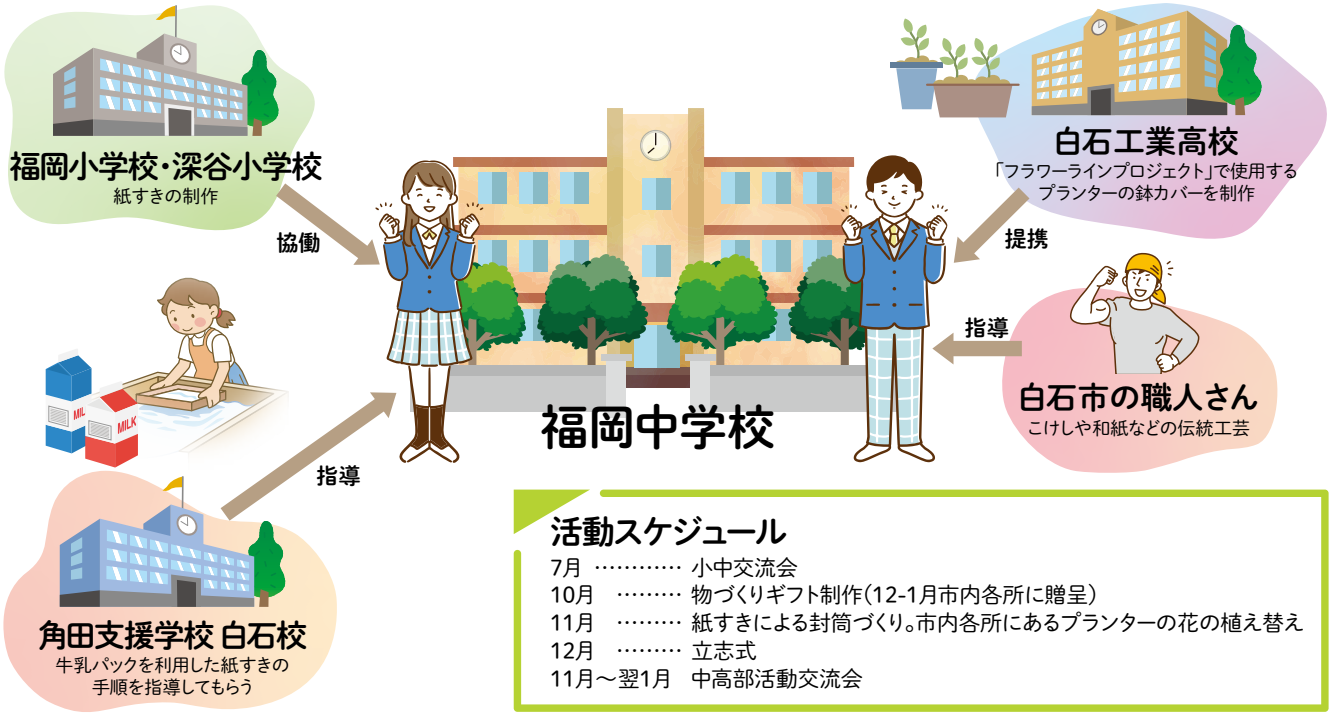
市内各所にあるプランターの鉢カバー等を制作

「フラワーラインプロジェクト」として、市内各所にあるプランターの花の植え替えを実施しています。プランターの鉢カバーは、市内の工業高校の協力により、木製で制作してもらいました。鉢カバーの上に色を塗ったり、絵を描いたりし、市内各所に設置します。「地域を自分たちで盛り上げよう」という地域貢献の気持ちにつなげていきたい。

ボランティアとして、荷物を運んだりと活躍。「やらされ感」からではなく、生徒たち自身が主体的に活動できるように。

活動の広がり

近隣の4校、福岡小学校、深谷小学校、白石工業高校、角田支援学校白石校と協力しています。スタッフ数は14名。コロナ禍による感染防止のため、「紙すき」の制作に各学校の代表者1名しか習いに行けなかったことも。今後は、工業高校の設備を使用してコラボできるようなことも、話し合っていきたいです。



活動スケジュール

7月 …… 小中交流会
10月 …… 物づくりギフト制作(12-1月市内各所に贈呈)
11月 …… 紙すきによる封筒づくり。市内各所にあるプランターの花の植え替え
12月 …… 立志式
11月～翌1月 中高部活動交流会

連絡先
●所在地：〒989-0232 宮城県白石市福岡長袋字山ノ下25 ●TEL：0224-25-3357
●E-mail：info@fukuoka-j.shiroishi-c.ed.jp ●ホームページ：http://fukuoka-j.shiroishi-c.ed.jp/
●代表者：柏 良行（校長） ●担当者：小野 宜也（主幹教諭）

優秀賞

特定非営利活動法人 しゅわえもん【東京都】

手話で自分と他者が分かり合い豊かに生きる

選考理由 特定の人たち以外とのふれあいが少ない中、映像コンテンツで多くの人がつながり、キャンプを通して子どもたちの社会性が育まれている点が評価されました。参加していた子どもたちが運営側にまわり、持続的な循環を生み出している点も高評価のポイントです。

活動の概要と目的

手話を使って子どもたちの世界を広げ、幅広い出会いと豊かな経験の場を創出しています

耳の聞こえない子どもたちの世界を広げ、豊かな経験を通して成長してほしいと、2005年から、ろう学校などで手話による絵本の読み聞かせを続けています。2020年からは動画の配信をスタート。日本手話で絵本の読み聞かせや手話語りを配信する「しゅわえもんナイト」のほか、小学生向けの「しゅわえもんニュース」や乳幼児向けの言葉遊び「手話リズム」など、趣向を凝らした多彩な番組が家族で楽しまれています。

さらに、読み聞かせをするスタッフの育成に力を入れるほか、絵本の読み聞かせワークショップも開催。2007年からは、読み聞かせ活動と並行して、小学生を対象としたキャンプを実施しています。

ろう児たちは、手話を使った動画で世界を広げ、自然と親しむキャンプで学校や学年の枠を越えた友情を育むなど、こころ豊かにたくましく成長しています。また、キャンプ経験者がスタッフ側で参加するなど、17年の継続により、次世代のリーダーも育まれています。

多彩な内容を手話で魅力的に伝えるために、表現を確認し合い、ブラッシュアップして番組が完成。出演者の豊かな表現力が、視聴者を引き付けています。

「しゅよみカフェ」は、ワークショップで絵本の読み聞かせを体験できるほか、ドリンク片手に、ろう児に関する子育ての相談ができる交流の場です。

子どもたちの変化・成長

動画配信では、手話を通じてさまざまな絵本やニュースなどにふれることで、夢や可能性を広げています。キャンプでは、違う学校の子と話せるようになり、花火やカヌーで遊びながら協調性や自己肯定感を育んでいます。活動に参加した子どもが成長し、スタッフ側になってサポートできています。

参加者の声

全国のろうの子どもたちが楽しめるので、これからも続けてください。（しゅわえもんナイト視聴者）

読み聞かせだけでなくクイズもありバラエティーに富んでいて、楽しくも文化の香りがする内容でした。（しゅわえもんナイト視聴者）

カヌーがいちばんたのしかったです。なぜなら、ゆらゆらすすむのが気もちがいいからです。（キャンプに参加した小学2年生）

きもだめしが一番楽しかった。最初はこわかったけど、友達やスタッフのおかげでこわくなくなった。（キャンプに参加した小学6年生）

子どもの時に参加したDMC※が本当に楽しかった。スタッフとして参加したDMCも楽しかった。今後も続けたい。（キャンプスタッフ）

皆で表現を考えてできあがったのを発表して、とても楽しかったです。（しゅよみカフェ参加者）

※DMC:デフ・メロウ・キャンプの略称

今後の課題と未来の方向性

動画の配信だけでなく、イベントや対面の活動を再開する準備を始めています。課題は、子どもたちやスタッフや相談者が、心置きなくいつでも集まれる事務所の設置です。引き続き、手話による絵本の読み聞かせができる人材や講師、自然体験に関する資格と経験を持った人材の育成に力を入れていきたいと考えています。また、いずれは、しゅわえもんの配信を海外でも楽しめる形にすることを目指しています。

活動の特長

手話を使った魅力的な教育コンテンツを配信

日本手話を使い、ろうの子どもや家族向けに、楽しく学べる番組を配信しています。内容は、読み聞かせや手話語りのほか、ニュースや言葉遊びなどバラエティーに富んでいます。出演スタッフには、NHKのテレビ出演者や芝居経験者などもおり、互いに表情や伝え方をチェックし合って精度を高めたうえで、配信しています。視聴者アンケートやSNSの投稿からは、内容への高い満足度がうかがえます。

手話を使ったさまざまな番組を盛り上げているのは、すばらしい絵本や魅力的な語り手たちです。

学校の枠を越えて自然や友とふれあうキャンプ

小学生約30人が参加する2泊3日のキャンプです。スタッフは、8カ月前から打ち合わせを重ねて信頼関係をつくり、子どもへの対応や安全対策などを入念にチェックします。参加する小学生は、学校も年齢もバラバラな色ごとのグループに分かれ、川遊びやカヌー体験などで自然とふれあいます。一緒に遊んだ友達との思い出は、子どもたちを笑顔にし、自主性や自己肯定感を自然に培い、こころの成長を後押ししています。

初めて会った子と、パン作りや川遊びや花火などを体験。自然の中での冒険が、子どもたちを大きく成長させています。

17年の継続が、次世代リーダーの育成に

キャンプ経験者の中から、2018年には3人、2022年には8人がスタッフとして参加。読み聞かせができるスタッフや講師も増えています。また、成人式では「成人の誓い」を日本手話で発表するなど、手話や、ろう者への理解を社会に広める次世代のリーダーも登場。17年継続し、人材が育った理由は、一人ひとりを大切に扱う気持ちが実践されてきた結果であり、その精神は若いスタッフへと引き継がれています。

「さっき失敗してたな、さっきはよかったね」と情報を共有し、フォローし合いながら、世話をする側も成長しています。

活動の広がり

2005年に関東地区のろう学校で始まった「手話による絵本の読み聞かせ」が、コロナ禍を経た2020年からは、さまざまな学びの動画に発展し、全国に配信されています。また、2007年から始めたキャンプは2022年で14回目を迎え、2年ぶりの募集が2日で定員オーバーとなるなど、人気のイベントとなっています。

連絡先
●所在地：〒167-0035　東京都杉並区今川1-3-1　●FAX：03-6915-0477
●E-mail：info@shuwaemon.org　●ホームページ：https://www.shuwaemon.org/
●代表者：野崎 誠（代表理事）　●担当者：秋山敦恵（事務局）

優秀賞

一般社団法人 みんなのレモネードの会【神奈川県】

クリスマスに笑顔を届ける、みんレモサンタ

選考理由 短期間のうちに全国に広がり、小児がん患児やその家族に求められている活動であることが窺えます。患児の自己肯定感を育てていることに加え、孤立しがちな患児とその家族が同じ立場の仲間とつながりピアサポートとなっている点も高く評価されました。

活動の概要と目的

お世話になった病院に感謝を、入院中の子どもたちに希望を、小児がんを経験した子どもサンタが届けます

小児がんを経験した子どもたちが、お世話になった病院や施設に、本や玩具などのクリスマスプレゼントを贈る活動です。

患児たちは、ドキドキしながらも自ら病院に連絡して日程や希望の品を確認。同じ立場の仲間やきょうだいと協力してクリスマスカード作りやラッピングなどの準備を進めます。いよいよプレゼントを手渡す日、サンタクロースに扮した患児たちの顔は、達成感で輝いています。

活動を通じて患児たちは、同じ立場の仲間と相談しながら人を喜ばせる工夫を楽しみ、お世話になった方々へのお礼を通して自己肯定感を高めています。その姿は、入院中の子どもたちに希望を与え、病院職員の励みにもなっています。この「みんレモサンタ」は、小児がん患児を支援する〈みんなのレモネードの会〉の活動です。会では、患児と家族はもとより家族同士がつながる多彩な交流会を展開しており、子どもたちには、思い出を共有できる幼馴染のような関係が構築されています。

プレゼントを渡す子どもたちは、お世話になった方々の喜ぶ顔を見て表情を輝かせます。プレゼントをもらう側から、渡す側になれた充実感もこみ上げます。

入院中にできた友達と再会し、一緒にプレゼントを用意する喜びがあります。お互いの苦労を知る友達と、お世話になった方に感謝を伝え、達成感も感じます。

子どもたちの変化・成長

プレゼントを心待ちにする側から渡す側になり「感謝や励ましを伝えたい」と相手を思いやるこころが育まれています。病気を経験した自分たちだからできる励ましに、やりがいを実感。同じ辛さを知る仲間とやり遂げた喜びや自信、「来年の活動に向けて元気になる」目標が、こころの支えになっています。

参加者の声

入院してた時、プレゼントをもらうとうれしかったから、みんなが喜んでくれたらいいな。（10歳・患児）

弟と一緒に手紙やカード、45人分の折り紙を作りました。量が多いラッピングも協力してできました。（9歳・きょうだい児）

今年もプレゼントを届けることができてうれしいです。病気をした僕たちだからこそ、届けたいと思っていました。（12歳・患児）

気分がまぎれたり、楽しいなって、少しでもプラスの気持ちになってくれたらいいなと思ってプレゼントを届けました。（12歳・患児）

入院中、仲良く過ごした子と再会し、楽しくプレゼントの準備をした時間は本当に幸せなひとときでした。（19歳・患児）

仲間の皆さんと活動できたことが「一人ではない」と思わせてくれ、自宅療養期間を明るく前向きにしてくれました。（患児の母親）

今後の課題と未来の方向性

「元気そうに見えても疲れやすい」など、患児の状態はさまざまなので、参加者が「無理なくやろうと思ったことがやれる会」を心がけています。課題は、多岐にわたる活動の事務作業について体制を整えること。将来は、大人になったサンタ経験者がサポート側に回る形を目指しており、ゆくゆくは「レモンのいえ」として、患児・家族の交流や宿泊ができる居場所兼就労の場をつくりたいと考えています。

活動の特長

希望をつなぐ黄色いバトンは、レモネードスタンドから

3歳でがんを経験した子ども会長（榮島四郎さん）は、小児がんの少女が庭にレモネードスタンドを開いて募金活動をした実話の絵本を読み、小児がんについて知りました。また、自分でもレモネードスタンドによる小児がん患者の支援を始め、2016年に〈みんなのレモネードの会〉が誕生。翌年に始めた「みんレモサンタ」は、がんを経験したたくさんの子どもサンタに引き継がれています。

2022年の夏に開催したレモネードスタンドによる募金の様子です。中央は、来場者に呼びかける子ども会長。

自主性と自己肯定感が自然に育まれる機会

行動が制限されることも多く、消極的になりがちだった患児でも、自分で病院と連絡をとり、日程や贈り物の希望を聞きます。また、お世話になった方々への感謝や入院中の子どもたちを励ましたい思いから、自然とクリスマスカード作りやラッピングにも力が入り、工夫を凝らしています。サンタクロースの姿でプレゼントを渡す際は、相手が喜ぶ様子にうれしさや達成感を実感するなど、自信や自己肯定感が育まれています。

「先生たちを喜ばせたい」「入院中の子どもたちを励ましたい」思いが自主性や工夫につながっています。

仲間やきょうだいと活動でき、家族同士もつながる

子どもたちは「しおり」を見てやり方を学び、保護者は「しおりの手引き」に沿って自主性を尊重しつつ、サポートしています。活動では、患児にかかりきりになりがちな親ときょうだい児、患児ときょうだい間のこころをつなぎ、同じ立場だからこそ分かり合える仲間と協力するなかで、絆を深めています。また、会の定例オンラインでは、全国の仲間とともに勉強や部活動でつながる、幼馴染のような関係が構築されています。

家族や仲間と相談したり、笑い合ったり。辛いときや不安なとき、楽しいときにつながる仲間がいることで「一人じゃない」と心強く感じています。

活動の広がり

絵本で見たレモネードスタンドによる募金に挑戦すると、応援の声とともに同じ病気を抱える家族の輪が広がりました。さらに、お世話になった病院にお礼のプレゼントを贈った一つの家族のクリスマスは「みんレモサンタ」活動へと発展。2022年には約40名のサンタが、感謝と励ましの気持ちを込めて25か所に贈り物を届けました。

活動スケジュール

6月募集→7月決定→8月顔合わせ会→9月～交流・打ち合わせ（月1回のオンライン報告会を11月まで、オープンチャットでの交流を12月まで開催）→10月病院に連絡→11月・12月プレゼント配布

多彩な活動内容

月2回 オンライン自習室／月1回 オンライン交流会／月1回 ティーンエイジャーおしゃべり部／屋外交流会（対面交流会・お泊り会 など）／レモネードスタンドによる小児がん支援と啓発活動／子ども会長作の絵本『ぼくはレモネードやさん』の朗読・講演ほか啓発活動／化学療法を行う際の「CV カテーテル固定具」プレゼント ほか

連絡先
●所在地：〒220-0073　神奈川県横浜市西区岡野1-6-48-402　●TEL：045-323-1170
●E-mail：makelemonade-37gogo@yahoo.co.jp　●ホームページ：https://www.minnanolemonade.com/
●代表者／担当者：榮島 佳子（代表理事）

優秀賞

一般社団法人 フリンジシアターアソシエーション【京都府】

表現力・防災力向上！地域防災演劇ワークショップ

選考理由 創作と演劇を通して子どもたちの防災に対する意識や創造力、コミュニケーション能力、協働力、表現力を育んでおり、地域防災にも貢献している点が高評価を得ました。他地域への展開もしやすく広がりを持っていることも評価の対象となりました。

活動の概要と目的

演劇を通して表現力を磨きながら、自分の命を守り、他者を助ける行動力を身につける

子どもの防災に関する知識・行動力の向上と、演劇を通じた表現力・コミュニケーション能力の向上を同時に目指す『地域防災演劇ワークショップ』に2016年から取り組んでいます。

児童館をベースに、防災アドバイザーや劇団員の協力のもと、子どもたちが「自分たちの街での防災」を考えて演劇を創作。「社会の中で役割を果たす」「地域コミュニティを担っていく」という地域社会の一員として活躍できる力を育むことも目的とし、災害時、子どもたちがまず自分の命を守る行動（自助）が取れるようになること、次に、他者を助けるための行動力（共助）を持てるようになることを目標としています。

毎年10月に防災プログラムの打ち合わせをしてテーマを決め、11月に参加者募集のチラシを配布。1月から2月にかけて、防災演劇ワークショップを開き（4日間）、2月中旬に地域住民を招いて「防災演劇発表会＋防災いろいろ体験会」を開催（1日）する計5日間の活動です。

本事業を通じて地域住民の多世代交流を生み出すことで、安全で安心な地域づくりも目指しています。

コロナ流行によって発表会ができなくなったことから、ドラマ動画を制作し、YouTubeで発表するスタイルに変更。

ドラマ動画は撮り直しができるため、子どもたちは納得がいくまでのびのびと演技にチャレンジしています。

子どもたちの変化・成長

防災を人に伝えようと演劇の練習を繰り返す中で、地域の人や防災についての理解が深まり、主体的に考えて動く力やコミュニケーション能力も向上。防災を切り口に地域のいろいろな人とつながるようになっています。

参加者の声

- 急に災害が起こったら、すぐには動けないと思うから、せめてよくいるところでは、ここではこうすると決めておきたいです。（小学5年生）
- セリフを覚えるのがむずかしかったです。だけど、みんなとどういうシーンにするかなどを考えるのは、楽しかったです。（小学5年生）
- 音が聴こえないことを想定しながら、動きを付けたり、小道具を作ったりするのがむずかしかったです。（中学1年生）
- 他の障害を持っている人や体が不自由な人のことも深く知って、その人たちの防災の仕方について考えたいです。（小学6年生）
- 耳が聴こえないと孤独な気持ちになりやすいと知って、他の人が協力的になることや理解を深めることが大切だと思いました。（小学6年生）
- 子どもたちと一緒に聴覚障害者の方とふれあうことができ、とても有意義でした。今後も参加したいと思います。（ボランティアの大学生）

今後の課題と未来の方向性

コロナ禍により演劇発表会からドラマ制作にスタイルを変更。YouTubeで配信し、繰り返し見てもらえるようになった反面、動画制作の費用捻出が課題となっています。6年間の活動で、消防団や地域包括支援センター、聴覚言語障害の団体など、地域の団体や住民とのつながりがたくさん生まれました。今後は児童館だけの取り組みではなく、「防災」を切り口に平常時から助け合える地域ネットワークの構築を目指して、自治会と共同し、地域イベントとして本活動を続けていきたいと考えています。

活動の特長

防災アドバイザーなどの専門家や当事者を招いての勉強会・体験会（1日目）

2020年は「高齢者と災害」、2021年は「聴覚言語障害の方と防災を考える」をテーマに開催。1日目に専門家や障害をお持ちの方をゲストに招き、高齢者体験（手足に重りや視界の悪くなるメガネを装着）をしたり、災害時の困り事などのヒアリングをしたり、災害に使える手話を教えてもらったりしました。こうして、災害時に限らず、他者をサポートする際に自分ができること、大人に頼る必要があることなどを理解し、いざという時に行動できる力を育みます。

1日目は、専門家やゲストにお話を聞いて、演劇作品のテーマとストーリー創作について話し合います。

劇団員協力のもと、仲間と協働して防災劇を創作（2〜4日目）

1日目に学んだことをベースに「自分たちの街での防災」を考え、演劇作品を創作します。台本作りのディスカッション、チームでのシーンの創作を通じて、自分の考えを話し、他者の話を聞き、力を合わせて作り上げる「協働する力」、演劇を創作することによる「そうぞう（想像・創造）する力」を育みます。演技面では、劇団員の指導によって子どもたちの表現力が引き出され、コミュニケーション能力の向上につながっています。

完成した台本をもとに、チームに分かれて繰り返し練習。演じることが楽しくなっていきます。

地域の人に防災を伝える防災演劇発表会と振り返りの会（最終日）

ワークショップ最終日は、保護者、児童館の子どもたち、地域住民（約100名）へ向けて、防災演劇作品の上演と、1日目に学んだ防災知識のクイズ大会や新聞食器作りなどを子どもたちのナビゲーションで開催します。学んだことを人に伝える体験を通じて、物事を理解しようとする力、役割を果たす責任感、困っている人を助けるボランティア精神を育みます。最後に振り返りの会をします。

最終日の振り返りの会。一人ひとりが5日間で学んだことや感じたことを発表します。

活動の広がり

2016年、「子どもの防災に対する知識・行動力の向上」と、発表会を通じて「地域交流」を図ることを目的にスタートしました。当時、明徳児童館に通う学童の保護者に、消防士経験のある防災アドバイザー、劇団衛星の劇団員がいたことから、児童館として地域防災を考える中で出てきたアイデアでした。協力機関は京都市明徳児童館、劇団衛星、下村水苗（防災アドバイザー）で、スタッフ数は4名。活動資金は助成金のみです。

実施・協力体制

一般社団法人 フリンジシアターアソシエーション
主催・全体コーディネート

明徳児童館
共催・会場提供・参加者管理・地域との調整

運営　運営

劇団衛星・他
演劇 WS プログラム提供
脚本制作

運営サポート

地域防災演劇ワークショップ

運営サポート

下村水苗（防災アドバイザー）
防災 WS プログラム提供
防災監修

協力団体

明徳児童館運営協力会	児童館の管理運営の協力・連携
岩倉明徳学区安心安全ネット推進協議会	明徳小学校区の地域コミュニティへの連携・協力
明徳学区消防分団	消防訓練の指導やAED訓練の指導など
岩倉地域包括支援センター	高齢者体験指導・認知症安心サポーター講座講師や声かけ体験指導など
あたたかいハート	聴覚障害者活動団体 手話・講演会講師派遣
立命館大学ボランティアサークルロビンフット	学生ボランティア

連絡先
●所在地：〒600-8445　京都市下京区岩戸山町440 江村ビル2F　●TEL：075-344-8970
●E-mail：ftas_info@ftas.info　●ホームページ：http://www.ftas.info/
●代表者：高橋 良明（代表理事）　●担当者：中田 綾乃（事務局長）

奨励賞

一般社団法人 カザグルマ【千葉県】

Cafeで家族の様に愛され育つ子どもたち

選考理由 地域が抱える問題に対し、コロナ禍の間も地域の力で寄り添い、短期間で子どもたちの第3の居場所をつくりあげた点が高く評価されました。また、地域の人たちとのふれあいが、子どもたちのこころのよりどころをつくっている点も評価されました。

活動の概要と目的

地域社会と協力し、居場所づくりを。近隣の人たちとの交流は、困難を抱えた子どもたちの安心感へとつながります。

子どもとその親が安心し、心豊かに暮らせる地域社会の実現に貢献することが目的。子どもたちの居場所をつくりたい、健やかに未来に希望が持てるように、と活動しています。

元おもちゃ屋さんをリノベーションし、駄菓子を置いたカフェ（2018年）を開設したことがきっかけ。口コミで保育士の資格や教員免許を持っている人たちが集まり、後にフリースクール（2021年）、アフタースクール（2018年）を始めることになりました。

成田市でも年々、不登校の数が増加しており、受け皿が必要とされています。カザグルマでは学校や家庭でもない第三の居場所づくりに取り組んでいます。貧困や虐待、不登校など困難を抱える子どもたちの早期発見や、ひとり親世帯などへの子育て支援を行っています。

学校、教育支援センターなど関係機関と情報を共有。地域の専門職の大人や地元の農家さんなどと連携して、体験型ワークショップを開催しています。不登校を受け入れている施設（ふれあいルーム21）や、家庭児童相談所とも連携しています。

13時30分までがフリースクール、15時からアフタースクール。昼食や夕食に「なかよしご飯（500円）」を食べられます。

フリースクールとアフタースクールでは、教員免許保持者や食育アドバイザーが、宿題を 見たり、サポートします。

来ている子どものうち、ひとり親世帯が約8割。小学1～4年生の子どもが多く、土日に は 15～20 人程度になることも。

子どもたちの変化・成長

学校に行きづらかったり、行けなくなった子どもが、スタッフやボランティアと対話を重ねていくうちに「学校に行ってみようかな……」と、気持ちに変化が表れるようになります。

活動の特長

フリースクール、アフタースクールをカフェと同じスペースで行うことで、年配者と子どもたちが交流することも。

11時半から15時までがカフェランチタイムで、一般の利用が可能。年配者などの大人も利用します。話を聞いてもらったり、見守られていることが、安心感につながります。夏休みなど長期休暇には遠足を実施（ひとり親世帯の場合、遠出は長期のお休みでもなかなかできないので）。誕生日会（その月に誕生日を迎える子を対象）やクリスマス、ハロウィンパーティーなどを行っています。遠足などのイベントには、教育委員会の後援がある場合もあります。

参加者の声

- カザグルマに来て、みんなと遊べるのが楽しい。みんなと食べるご飯がおいしいからカザグルマが好き（小学2年生）
- 放課後、家に誰もいなくても、カザグルマに行けばみんないるからうれしい。ゲームや好きなことができて最高（小学6年生）
- うちの子は放課後はもちろん、土曜日も通うくらい楽しんでいます。母親同士の憩いの場にもなっています（小学2年生の保護者）
- 『多様性を大切に』といいますが、頭で理解ではなく、経験からしか得ることができません。その感覚が学べます（小学4年生の保護者）

今後の課題と未来の方向性

来ている子どものうち、ひとり親世帯が約8割を占めています。家に誰もいなかったら、結局は外に出てしまうことに。こうした現状にも危機感をもっています。スタッフが二人以上常駐する体制ですが、ボランティアに頼っている部分もあり、運営が厳しい。持続的に、事業として成立するような体制を目指していきたいです。人材を確保するためにも、資金面での問題を解決し、安定した運営をすることが当面の目標。

連絡先
●所在地：〒286-0036　千葉県成田市加良部5-5-5　●TEL：0476-55-2703
●E-mail：cafekazaguruma@gmail.com　●ホームページ：https://www.kodomonoibasyo.org/
●代表者／担当者：清水 祐治（代表理事）

歴代全国大賞受賞団体 2008〜2021年度 ※詳しい活動内容はホームページで紹介しています。

2021年度 **一般社団法人 Ponte（ポンテ）とやま（富山県）**

テーマ ごちゃまぜの中で育つ〜つながる・まなぶ

2020年度 **特定非営利活動法人 おやこ劇場松江センター（島根県）**

テーマ げきじょっこまつり　初めてのお買い物

2019年度 **社会福祉法人 阪南市社会福祉協議会（大阪府）**

テーマ あなたも私も笑顔になる〜子ども福祉委員〜

2018年度 **特定非営利活動法人 パノラマ（神奈川県）**

テーマ 高校内居場所カフェ〜先生でも親でもない大人がいる、文化的シャワー提供の場〜

2017年度 **長野市立城東小学校（長野県）**

テーマ 共に学ぶ長野ろう学校との41年目の交流活動〜共生社会の形成に向けて6年間の継続交流〜

2016年度 **和歌山県立熊野高等学校 Kumanoサポーターズリーダー部（和歌山県）**

テーマ 地域に根ざし、地域に貢献する高校生リーダーを目指して

2015年度 **鹿角（かづの）市立八幡平（はちまんたい）中学校（秋田県）**

テーマ 郷土愛を育み、人間関係力を培う八幡平ボランティアガイド

2014年度 **仙台市立南吉成（みなみよしなり）中学校（宮城県）**

テーマ 大震災から学び、前に進む力を培う、復興支援活動と防災教育

2013年度 **熊本市立出水南（いずみみなみ）小学校（熊本県）**

テーマ 小学校と支援学校の子どもたちが学び合い、成長し合う交流活動

2012年度 **東中ファミリーサポーターズ・東中地域活性隊（兵庫県）**

テーマ 地域・学校・家庭と生徒たちによる循環型の地域活性活動

2011年度 **石榑（いしぐれ）の里コミュニティ（三重県）**

テーマ 地域全体で子どもを守り育てるための学校と地域による組織づくりと協働活動

2010年度 **特定非営利活動法人 オバパト隊（熊本県）**

テーマ 高齢女性パトロール隊による、安心安全な子育て環境づくり

2009年度 **山形県立置賜（おきたま）農業高等学校演劇部（山形県）**

テーマ 農業高校の視点から、食を伝える食育ミュージカル

2008年度 **公益社団法人 群馬県助産師会（群馬県）**

テーマ 子どもの自己肯定感を育む「いのちの講座」

公益財団法人 パナソニック教育財団

〒105-0001　東京都港区虎ノ門1-1-10 第2ローレルビル6階
TEL.03-5521-6100　FAX.03-5521-6200
https://www.pef.or.jp/kokoro-forum/ こころを育む